

---

# 花のあんぶれら

四季道理

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花のあなぶねら

### 【Nコード】

N2899L

### 【作者名】

四季道理

### 【あらすじ】

しずくは一つ下の弟。いつまでもお互いが子供のままでいられるとおもっていた15の夏。

## 前編

心を打ち砕かれる。

こういつ瞬間のことを言うのかもしれないと思ったのは、15の夏だった。

その日はからりと晴れた気持ちの良い天気だった。

夕暮れ時が近づき、開けはなっていた窓の代わりに網戸を閉めたときだった。

遠くに見慣れた影が見えた。

しずくだ。

一つ下のわたしの弟。

いつのまにかわたしよりも背が高くなって、ひよろりとしているけれど、時々わたしに見せる笑顔はあどけない。

わたしは他のみんなから、少しのんびりしているねと言われるくらい、おしゃれとか興味ない。

同じようにしずくも勝手にずっと幼いのだと勘違いしていた。

時々、しずくはみんなに優しいから女の子に人気あると聞いていたけれど、わたしの弟がそんなに人気があるわけではないと思っていた。

だけど・・・わたしの視界がとらえたもう一つの影に、わたしの息が止まりそうになった。

家から100mと離れていないところで、しずくの影が立ち止まり、もう一つの影。スカートを着ているその影にゆっくりと重なった。

その瞬間わかってしまった。

大事に思っていたし、すぐがわたし以外の人と口吻キスしている。

わたしはなんだか胸の奥がズキと痛んで、思わずカーテンを締め  
た。

幼稚園からずっと一緒にいた。

青い幼稚園の胴衣の上からおそろいの黄色い鞆を斜めに掛けて、  
手をつないで行く。

ちょっと生意気なところもあるけど・・・なんだろうこの気持ち  
は。

いつかは手放さなければならないとわかっていた。

立っていられなくてしゃがみ込んだ。

「だめだなあ。わたし」

つぶやきは誰に向けるものでもない。

目をつむってじっとしていると、さきほどの光景がよみがえる。

まぶたの奥が熱い。

やだ。

「ただいまー」

やがて、先ほどの光景以外はいつもと何の変わりもない声が階下  
から聞こえてきた。

「おかえり」とそれに応えるのが自分の役目だと思っていた。

ずっとわたしが家にいる限りは。

今日はだめなの。

しずくがわたしが家にいることに気づかなければいい。

だけど、しずくはわたしが家にいることを簡単に気がついた。二  
階に上がってきてドアをノックする。「どうしたの。みどり」

返事できないのに。

わたしはいつのまにか浮かんでいた嗚咽を堪えるのに精一杯だった。

「具合悪いの？」

心配そうな声。

違うの。

理由なんてない。

「入るよ」

「だっ・・・めえ」

ぶんぶんと首を横に振るわたしの前でドアは簡単に空いてしまった。しずくの侵入を許してしまった。

部屋に入ってきて、わたしの様子にすぐ気がついたしずくは顔をゆがめた。

「なんで泣いてるの」

「なんでも・・・ない」

「ごしごしと手の甲でまなじりをこする。」

「目にはこりはいっちゃっただけで」

「止めるよ。そんなに擦ったら跡になる」

やんわりとした声がすぐ上から振ってきて、わたしの手首がしずくにとらえられた。

いつまでも白くてやわやわしたわたしと違って、その手は堅くて・・・男の人のようだった。

最近、しずくに触れたことなく・・・そんなことにも気づいていなかった。

見上げたらしずくが心配そうにわたしを見下ろしていた。

その顔は、いつものしずく。

少し彫りが深くてすつと伸びた鼻筋がきれい。

そのきりりとした黒い目にしゃがみ込んだわたしの姿が映し出されていった。

わたしがしずくの一番なんて誰が決めたの。

冷たい声がわたしの胸の内で響く。

しずくがいつのまにか男の人のようになっていたことも知らなかったくせに。

触れられたところが熱い。何でだろう。まるで心臓みたいにドキドキしている。

「放して」

少し腕を引つ張るくらいではビクともしなかった。

「泣いてた理由を教えてくれたら放すよ」

「だから」

「どうしてカーテン閉めてるの？」

「窓を閉めてて・・・」

二人のキスする影を見て・・・動揺して閉めたなんて言えない。

「まっ・・・まぶしかつたから」

苦しいいいわけだっただろうか。

ちらりと見上げると、全くわたしのいいわけを信じていない顔。

「ふうん。夕日は落ちてたと思うけど」

「お姉ちゃんを疑うの？」

これはいつもの決まり文句。

姉の権力で、弟を黙らせる。

ちよっとくらいの矛盾を感じても、しずくはわたしに従ってくれていた。

お弁当の卵焼きが大好きで、しずくが他所を向いている隙に一つ食べたときも。

お母さんをまねしてプリンを作ったとき、砂糖と塩を入れ間違っ  
てしまったときも。

同じように通用していた。だけど。

「見たんだ」

あっさりと返された。

なっ・・・なんで、これが通用しないの。

「なっ・・・何にも。みつ・・・見てないよ。きっ、キスしてたとか・・・」

「キス？」

いぶかしげに首を傾げるしずく。

やがて合点がいった顔で嬉しそうににっこり笑った。

「なんだ。そういうことか」

「してたんじゃないの？」

「うん。してた」

何だろっ。この反応は。

なんだか、すごくやばい感じがする。

「ほら、言ったから・・・手。手放して」

この心臓のドキドキがしずくに聞こえると、もっとやばい感じになる気がした。

「放すよ」

そう言ったのに、しずくは手を放さなかった。

代わりにしずくの影がわたしの上に降りてくる。

ああ、やっぱり鼻筋通ってるよね、とか・・・そんなこと考えてる場合じゃなくて。

やがて、かすかに開いたわたしの唇にそつと触れた・・・って・・・

・今の柔らかいもの。

しずくはすぐに手を放して、すぐにわたしから離れた。

「いっ・・・今は」

しずくは、笑いながらシーと唇の上に人差し指を一本立てた。

「口止め」

「ひっ、ひどい・・・ファーストキスが」

ふふ、としずくは笑って。「またね」

そう言い残して、部屋を出て行った。

後には、姉の権威を失墜させたわたしが一人。

## 後編

いつだって、みどりは俺にとっては謎が多い。

みどり自身には、特に嫌なこともない。

まああえて上げるなら、面倒なところがあるくらい。

例えば、いつまでたっても人の事を子供扱いするところとか。

未だに、姉の権限を振りかざそうとするところとか。

だけどそんなことはどうでもよいことにすぎず、基本的に好きなところの人が多い。

俺よりも頭ひとつ分小さくて、抱きしめればおれてしまいそうなほど細っこいくせに、威勢の良い勝気なまなざしで見上げてくるところとか、まあ…普通に可愛いと思う。

クセツ毛なのを気にしてて、毎日、うんうん洗面台の前でドライヤーと格闘しているところも。

そういう話を同級生のタツヤにしていたら、それは姉ではなくて、女として見てるんじゃないかと言われた。

ドキリとした。

タツヤの姉は、ガサツですぐにタツヤを殴るらしい。

みどりがそんな姉ではなくて良かったと心底思う。

俺の顔色が変わったのを見て、タツヤはそれ以来その話題には触れなくなった。

まあ、姉の話題でからかったりするけれど、扱いは、シスコンのレベル。

自分でもシスコンの自覚はある。

最近告白されて付き合いだした奈緒美にもしばしば指摘される。

俺が「姉が」とか言つと、ジト目でこちらを見て、また始まったよ、みたいな。

仕方ないだろう。



俺の家は、両親とも共働きで揃って夜遅い。  
だから、みどりが親代わりなんだ。  
過ごす時間も長いし。

いつもみどりが一足先に帰って、買い物済ませて、俺が帰ったら一緒に飯を作る。

それが可哀そうだと思ったことはない。

いつだって、みどりがいたから。

それをシスコンと言われれば、そうなのかもしれない。

泣いてるときも、笑ってる時もいつもみどりがいた。

単なる姉ではないのだ。

ああ。単なる姉ではない。

自覚をしつかりしたのは、1週間ほど前。

せがまれてした奈緒美とのキスシーンを見られて、いつもにもまして挙動不審のみどりが可愛くて、つい手を出してしまった。

その瞬間に、自覚した…もの。

つまり…俺は…みどりを。

だが、そんな俺をよそ目にみどりはいつもと変わらない。  
謎だ。

普通、弟にキスされたらちよつとは動揺するよな。

嫌だとか…思われてたら、それなりにシヨックだが。

今日も、いつもと変わらず、白いエプロンを身に付けて台所にたつみどり。

手際よく魚を焼いて、お味噌汁を作っている。

いつもなら手伝うが、今日は土曜日だから、俺は少し寝坊で登場。  
両親は今日も仕事である。忙しいことだ。

「おはよう。みどり」

「おはよう。寝坊だね。しずくにはめずらしいね」

笑いながら、俺の茶碗を渡してくれる。

俺は炊飯器の蓋をあけて、しゃもじでごはんをよそう。ついでにちいさいみどりの茶碗にも。

みどりはその間に、焼き魚を皿にあけ、味噌汁を椀にもってテーブルの上にのせた。

「うーん。まあ、悩める青少年なんだよ」

「なによ。それ」

エプロンをとって椅子に座るみどり。

俺も向かいに座って、箸をとりあげて「いただきます」。

茶碗を手に、白いほかほかのごはんを口に運ぶ。

そして、ちらりとみどりを見る。

相変わらず、変わらない。

ちよっとくしゃっとはねた髪の毛も。

ピンク色の頬も。

触り心地の良さそうなもちもちした白い肌も。

あー…なんだかなあ。

爽やかな朝のはずなのに、今更姉のパンツに反応する俺ってなにもの。

「どうしたの？食欲ないの？」

すっかりみどりに魅入って、箸の止まっていた俺にみどりが気づく。

視線が具合でも悪いのかと問いかけてくる。

「あ、ああ。何でもない。ちよっと…ははは。はあ」

さすがに、姉に発情してますとは言えなかった。

「最近、おかしいよね。しずく」

ポツリと漏らされた言葉にドキンとした。

「え。そうかな」

思わず声がうわずってしまふ。

「このまえだって。いきなり…あんなことしてきて…でね」  
むによむによと語尾をごまかすしずく。

「キスのこと？」

弾かれたようにしずくが顔をあげた。  
顔が真っ赤になっている。  
なんだ。

自覚、みどりにもあるんだ。

「ばかっ。あれはキスとかじゃなくて」

「キスだよ。俺がキスしたかったんだもん」

「だもん、であるかぁー」

なんだかちよっとすっきりした。

悶々としていた一週間がバカみたいだ。

ちよっとしずくには悪いかなど思ったけど、しずく相手に我慢するの慣れない。

「あかさ。俺、しずくのこと」

「ぎゃあー！」

…なんでそこでその悲鳴。

おまけにそれ、恐竜とかに襲われてる時とかにでそんな叫び。  
「だっ…だめだよ。しずく。その先は言っちゃ。きつ、禁断の」

「好きだよ」

あっさりと言ってやった。

自覚をしてからの一週間の若人の苦悩を舐めるなよ。

みどりは赤くなったり、青くなったり。忙しいヤツ。

「あと。禁断じゃないから」

「は？」

「俺、養子だよ。忘れたの」

「えーと」

ぼりと頬を搔くみどり。

これはすっかり忘れてるな。

「2歳くらいに俺がはじめてこの家に来たの憶えてないのか？」

「え。そうだったっけ？」

がくり。

「物覚えの悪い3歳児だよな」

「だっ、だって…さあ」

「だから。大丈夫だから」

まあ、両親を説得したりとか…いろいろ面倒なことはあるけど。

俺は茶碗を置いて、立ち上がった。

みどりがぎよっとしたように俺を見て、自分も椅子から立ち上がった。

一歩後ろに下がって。

「ぜっ、全然大丈夫な気がしないんですけど。わたし」

「そうかなあ」

俺はその言葉に小首をかしげて、あっさりみどりを捕まえる。

そして小さい体を抱き寄せて、ふわふわの猫っ毛に顔を埋める。

「ぎゃああ。放せえっ」

小さくわめいているみどりはこのさい放っておく。

「あー。これだよ。この感触」

抱きしめてるだけでおれてしまいそうに小さな体だけど、誰よりも俺に安心感を与えてくれる存在。

「好きだよ。みどり」

だから、ずっと一緒にいてね。

後編（後書き）

出会いは、初夏。

みどり3歳。しずく2歳。

両親を亡くして身寄りの亡くなったしずくを、みどりの両親は引きとってくれた。しずくの両親と親友だったと告げて。

しずくがもらわれていった日は、梅雨明けにも関わらずシトシトの雨だった。

しずくの心を表すかのように。

だが、訪れた玄関で、黒い喪服で登場したしずくを迎えたのは。腕いっぱいひまわりの花束を抱えた女の子。

目が蕩けそうなほどの笑顔とともに、その花束をしずくに渡す。

「おかえりなさい。しずく。今日からずっといっしょだよ」

しずくは突き動かされたように花束を受け取り。

ぎゅっと抱きしめ。

瞬間、きゃははと笑い声が聞こえた。

自分の上を指差すみどり。

「はなのかさみたいだね」

嬉しそうに。

見あげれば、自分の頭上を覆うひまわりの花。

まるで、この女の子みたいに。

自分の心に降っていた雨を覆うように。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2899/>

---

花のあんぶれら

2010年10月8日11時21分発行